

December 2023 /  
January / February 2024  
No.26

A Newsletter from SCGO-JSOG Project  
on Women's Health and Cervical Cancer

# カンボジア 女性のヘルスプロモーションを通じた 包括的子宮頸がんサービスの 質の改善プロジェクト

JICA 草の根技術協力事業(草の根パートナー型)

PROJECT FOR IMPROVING THE QUALITY OF  
COMPREHENSIVE SERVICES FOR CERVICAL CANCER

## カンボジアにおける子宮頸がん診療の課題と今後の支援の可能性

竹中 将貴 (東京慈恵会医科大学産婦人科学講座)

「女性のヘルスプロモーションを通じた包括的子宮頸がんサービスの質の改善プロジェクト」の一環として、カンボジア派遣に行っていました。今回の派遣は、本プロジェクトが今年の7月10日で終了となるにあたり、技術支援を行うとともに、今後カンボジアの子宮頸がん診療におけるさらなる支援の可能性を探ることが目的の一つでした。2024年2月5日から2月9日に東京慈恵医科大学産婦人科の高橋一彰医師と共にカンボジアのクメールソビエト友好病院(KSFH)を訪問し、子宮頸がんの手術や診療体制を中心に視察を行いました。

今回の派遣に際して事前にカンボジア側より、子宮頸がん手術の技術指導の可能性を検討して欲しいという要望がありましたので、子宮頸がんに対する広汎子宮全摘出術2件と単純子宮全摘出術1件を見学しました。詳細は高橋医師の記事に譲りますが、限られた医療資源の中で可能な範囲の手術が施行されており、基本的な技術も十分に習得できていました。そのため、今後の支援として子宮頸がん手術の技術指導の必要性は、現時点では高くはないと考えられました。

一方で子宮頸がん患者の診療体制においては、新たな課題が見えてきました。今回の視察では子宮頸がんの診療体制の把握のため、産婦人科のみならず病理部・腫瘍科(放射線治療および抗がん剤治療を行う部門)の視察も行いました。本邦では、産婦人科・放射線科・腫瘍内科などが協力し、定期的な腫瘍カンファレンス等を通して患者情報を共有することで子宮頸がん患者に適切な医療を施していることが多いと思いますが、今回視察をしたKSFHでは、部門間の情報共有が皆無であることが明らかになりました。さらに産婦人科内においても定期的な手術カンファレンス等は開催されておらず、医師間で診療方針にかなり差があることも分かりました。部門内および部門間の患者情報の共有は子宮頸がん診療において極めて重要な要素でありますので、この点をカンボジアにおける子宮頸がん診療の課題として挙げさせて頂きました。

以上より、今後カンボジアにおいて子宮頸がんの診療レベルのさらなる向上を目指すためには、部門内および部門間で定期的なカンファレンスの開催を提案し、患者情報を適切に共有することが必要です。(次頁へ続く)



KSFHの腫瘍科にて



SCGO Kanai 理事長への視察報告



KSFHの病理部門

ファーストステップは部門内での定期的なカンファレンス開催になると思いますが、本邦医師がアドバイザーとしてカンファレンスにオンラインで参加して多方面からアドバイスを行うことは、今後の支援方法の1つとして検討できるのではないかと考えました。さらにカンファレンスで興味深い症例があれば、ケースレポートの作成を指導するなど、アカデミックな支援の可能性も拓けてくるのではないかと考えました。

今回の視察を通して我々が考えた今後の支援の可能性については、カンボジア産婦人科学会(SCGO)のKanal理事長とも共有させて頂きました。今回の視察の成果が、今後のカンボジア支援を検討する上での一助となれば幸いです。

## クメールソビエト友好病院における子宮頸がんに対する手術を視察して

高橋一彰(東京慈恵会医科大学産婦人科学講座)

日本産科婦人科学会(JSOG)-カンボジア産婦人科学会(SCGO) JICA 草の根技術協力事業「女性のヘルスプロモーションを通じた包括的子宫頸がんサービスの質の改善プロジェクト」は、カンボジアにおける子宮頸がんの検診等の技術の普及に貢献し大きな成果をあげてきました。SCGOの婦人科医師たちは、次の解決すべき課題として、子宮頸がんと診断された患者に対して、世界水準の治療を行いたいと考えている様です。今回の視察では、検診に対する技術支援に加え、子宮頸がん治療の改善を目的に、広汎子宮全摘出術(RH)の見学と講義をして欲しいと依頼されました。

講義提供に先立ち、カンボジアにおける低・中所得者層の患者を対象としたクメールソビエト友好病院(KSFH)にて3例の手術を見学しました。KSFHでは年間約100例の子宮頸がんに対する手術が行われています。見学した手術は、1件目が子宮頸部上皮内癌に対する単純子宮全摘術(TAH)、2件目が子宮頸がんIIA期に対するRH、3件目が子宮頸がんIB2期に対するRHでした。

TAHは、非常に熟練した手術が行われており、手術方法も本邦と概ね差はなく、安全な手術が行われているという印象を受けました。RHについては膀胱側腔や直腸側腔の展開を十分に行わずに手術を進めていたため、基靭帯血管の処理、膀胱子宮靭帯前層後層の処理、傍腔組織が不十分な印象を受けましたが、手術操作自体は安全に行われており、出血量も目測ですが200ml程度でした。骨盤リンパ節郭清はRH症例では施行されていましたが、外腸骨リンパ節の生検程度に留まっていました。また、骨盤神経叢温存術式は施行されていませんでした。

手術見学を基に、KSFHの婦人科スタッフ、医学生、他の地域病院医師など、約60名を対象にZOOMおよびface to faceでハイブリッド型講義を行いました。講義にはRHに必要な解剖知識と手術動画を用いて、膀胱側腔や直腸側腔の展開、基靭帯血管の処理、膀胱子宮靭帯前層後層の処理、傍腔組織の処理を中心に行いました。KSFHの婦人科スタッフ、医学生は非常に熱心に講義を聴いて下さり、ディスカッションの内容も多岐にわたりました。

全体的に手術手技はしっかりと習得しており、安全な手術施行されていました。さらなる技術の向上を目指すことも不可能ではありませんが、医療資源が限られていること、排尿障害やリンパ浮腫などの術後管理の質が不十分であること、また退院後に通院が困難な症例が多いことを考慮すると、現時点の医療の状況に応じた適切な手術が行われているのではないかと考えました。



講義の様子



講義を終えての記念撮影



手術見学の様子

## プロジェクト関係者へのインタビューを実施して

井本敦子(長崎大学 大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科)

この度「女性のヘルスポモーションを通じた包括的子宮頸がんサービスの質の改善プロジェクト」に参加する機会を得て、2024年1月25日より2月7日までの2週間、カンボジアに渡航させていただきました。新型コロナウイルス感染症パンデミックにより、海外出張を控えていたため、久しぶりの海外渡航、そして、初めてのプノンペン訪問、本プロジェクトにも初参加でしたので緊張しましたが、このプロジェクトに長年ご尽力されている長崎大学の藤田則子医師(元国立国際医療研究センター(NCGM))およびNCGMの神田未和助産師の支援により、充実した活動を行うことができました。今回の訪問目的として、本事業で実施した健康教育、検診、診断治療の実施プロセスに影響を与える要因を検証するために、事業実施者であるSCGO医師・事務局スタッフおよび教育省関係者へのインタビューと小学校女性教員へのフォーカスグループディスカッションを行い、事業実施上の困難や内的・外的要因などについて質問し情報収集しました。

SCGO医師へのインタビューでは、病院での分刻みの忙しい業務の中、笑顔で対応下さり、質問にも真摯に答えて下さいました。インタビューを通じて感じたのは、各々がプロジェクトに強くコミットメントし、活動を通じて多くの経験や知識を得ており、それらがSCGO医師らの向上心を刺激しているのではないかとことです。フェーズ1から参加している医師もおり、長期にわたってプロジェクトに関わり蓄積された経験は我々日本人が想像する以上に影響を与えているかもしれません。SCGO医師ら自身、そのことに気づいていない可能性もあります。

また、現地でプロジェクト活動を実施する上で、様々な事務的・管理的作業が発生しますが、それを支えるのがSCGO事務局になります。まさしく、縁の下の力持ち的な役割になりますが、この事務局の方々の事務能力の高さにも驚きました。たとえば、今回の短期滞在で多くのインタビューをスムーズに実施するにはどうしたらよいかを考え、移動時間が最小限になるよう訪問先の日程を組むなど様々な配慮をしてくださりました。かゆい所に手が届く仕事ぶりは一朝一夕では身につかないと思います。これまでの日本人関係者との仕事を通じて学んだことも多いのではないのでしょうか。真面目で、献身的、配慮も利く。なんだかべた褒めしていますが、私も彼女たちのようにありたい、すばらしいなと感じたので、正直にお伝えしたいと思います。

プロジェクト関係者が活動を通じて様々な経験を積んで、おそらくプロジェクト当初よりもはるかに成長されたのではないかとお察しします。関係者の皆様が学会や各々の職場においてその能力が十分に発揮されることを祈念いたします。また、今回の派遣を通じて、私自身、インタビューの難しさや楽しさを気づかせて頂く貴重な機会を賜りました。ご協力いただいた関係者の皆様に、この場を借りて心よりお礼申し上げます。



プノンペン市教育局へのインタビューの様子



小学校教員を対象としたフォーカスグループディスカッション